

第8回「札幌における芸術祭と創造都市」 講義録

【日時】2018年6月8日（金） 18：30～21：20

【場所】大阪市立大学 梅田サテライト 105 教室

【講師】現代美術家／アートディレクター 端 聡 氏

【ファシリテーター】大阪市立大学大学院都市経営研究科 吉田隆之 准教授

【記録】大阪市立大学大学院都市経営研究科 玖島 理与

1990年代にドイツに滞在し、ヨーロッパ各地で行われる国際芸術祭と出会い、札幌でも芸術祭を実施すると決意し、それを実現に導いた端聡氏に、札幌で国際芸術祭が行われるに至った経緯と、創造都市の概念による20年間における個人の活動について、ご講義頂いた。

1. ヨーロッパに於ける国際芸術祭との出会い

札幌を拠点に芸術活動する中、1995年にドイツ政府管轄ドイツ・学術交流会（DAAD）の助成によりドイツに滞在した。その時、様々な規模の国際芸術祭に、可能な限り足を運び、感じたのは、

- ・子供から大人まで、幅広い年代の人々がアートに親しんでいること
- ・アートにより新たな産業が生まれていること

であった。そして、芸術祭を札幌でも開催することを強く決意した。

その後、ドイツのキュレーター、ギャラリスト達に、その方法に関するヒントを聞きまわった際、多く耳にしたのが、ヨゼフ・ボイスの提唱する「社会彫刻概念」であった。「社会彫刻概念」とは、芸術や創造性はさまざまな産業を生み出し、また社会問題を考えるきっかけとなり、地域を活性化するという考え方であり、芸術の範疇を拡張したものである。また、彼らから北海道における芸術の普及状況について問われ、

「北海道立近代美術館で開催される印象派の展覧会などでは、来館者数が約20万人という結果をおさめ、芸術が普及している地域である。」

と答えると、

「動員数を稼ぎやすい作品を展示し、それを数で評価することは、北海道民に対して芸術普及のありばい作りをしているようなものだ。人間は新しいものやすばらしいものを見て理解する能力を持っている。まずは地域住民の感性を信じ現在進行形の作品を見せることから国際芸術祭や社会彫刻が始まる。」

と、厳しい指摘を受けた。端氏にとってこの出来事が、札幌国際芸術祭実現への更なる起爆剤となった。

2. アートツーリズムの考え方に沿った方向性

芸術祭実現に向けて端氏は、札幌市の行政、美術館の館長などに相談を持ちかけた。しかし帰ってきたのは「行政は力を貸せない。」という言葉だった。そこで、「アートツーリズム」の考え方に沿った方向性を行政に示した。

その頃、札幌市北区において、イサム・ノグチの「モエレ沼公園」が構想17年200億円以上をかけて建設されていた。しかし、観光資源として十分議論されないまま建設され

たことを疑問視する声上がり、グランドオープンの1年前に「アートツーリズム推進委員会」が設立され、端氏はその委員となり、札幌市におけるアートツーリズムと国際芸術祭の必要性を訴えた。そして、グランドオープン・セレモニーの芸術監督を務め、コンテンポラリーな表現でのステージを行い、アートが札幌の観光に多大な利益をもたらすことを実証した。その結果、アートツーリズムの効果を行政が認識し始め、札幌国際芸術祭開催に一步近づいた。

アートツーリズムの事例

- ・1930年にアメリカでニューディール政策の一環として行われた失業アーティストの救済政策「フェデラル・ワン」の効果によるもの。
- ・1980年代に、ニューヨークでドーナツ化現象により、家賃の安いイースト・ビレッジにアーティストが集まり、観光地となったもの。
- ・2000年頃からアート地区化した、中国の798芸術区

3. 文化助成金を受けず小規模芸術祭を実現

「行政は力を貸せない。」との言葉を受け、文化助成金を受けず、自力で資金を調達し、北海道立美術館で小規模芸術祭「FIX! MIX! MAX!」を開催した。その陰には、端氏の主催するアートスクールの生徒であった、アーティスト門馬よ宇子氏の大きなサポートがあった。そして、公的美術館を利用するには400~500万円が必要といわれるなか、それを助成金無しで開催することが出来た。その事実に対して行政は、札幌市には潜在的に観客動員できる力があると認識したと共に、新たな民間運動「札幌プレ・ビエンナーレ」に繋がった。

2006年、当時の市長は「札幌市文化芸術振興条例」を施行し、「札幌創造都市推進委員会」立ち上げ、国際芸術祭の必要性を謳った。また、2011年には大企業の賛同を集めることに力を入れ、実行委員会のメンバーとして経済界から多くの人が参画させた民間運動「札幌プレ・ビエンナーレ」を北海道立近代美術館、札幌芸術の森美術館で開催し、そのことが、札幌国際芸術祭開催への大きな力となった。

4. 創造都市

2006年、地下鉄大通駅と地下鉄東西線バスセンター前駅を結ぶ地下コンコースを利用し、期間限定のアート展を行った。それが常設化され、「500m美術館」として、現在も若手作家や先進的実験的な作品を中心とした展示が行われている。地下通路という日常空間で、無料でアートに触れることができる、市民にとって画期的な場となっている。

また、端氏は自らアートスクールとギャラリーを運営し、若手はもちろん、アートを学びたい市民にその機会と発表の場を提供し、多くのアーティストやボランティアの育成に力を注いでいる。

札幌国際芸術祭は小さいことの積み重ねにより、民間の人が作り上げた芸術祭であり、「創造都市」の概念をもって実現した芸術祭である。

以上